あおに重なる

がっちょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あおに重なる

【Ｎコード】
Ｎ０８９９Ｚ

【作者名】
がっちょ

【あらすじ】
獣族と魔族がくらす世界、リトビスに現れたのは、記憶を失った少年。少年の存在はまさにありえないもので、困惑しながらも生活していく。リトビスの紛争に巻き込まれた少年は、自分に隠された大きな秘密を知っていく。

プロローグ（前書き）

初投稿です★文章力なんて全くないですが（＜＿＞）のんびり書きますので、是非読んでください。

プロローグ

歪みのない綺麗な月
届きそうで届かない
近そうで遠い
吸い込まれそうな黒
浮かぶ　あおい月
どんどん薄れてゆく
僕の記憶の中の…

木枯しが吹きはじめたこの日。僕はいつものように学校へ行くため、家のドアを開けた。
肌寒い気温に体が震え、学ランの襟に首をうずめる。

「ワン！　ワン！」

庭から愛犬、柴犬のコタローが駆けてきた。名前を呼ぶと、僕の足元を元気に走り回る。

「相変わらず元気だな。学校から帰ったら、散歩に連れていってやるからな」

「わかった」とでも言うように一際大きく吠えたコタローの頭を撫で、僕は道路に出た。
近所の人たちと挨拶をかわし、横断歩道にでる。
信号が丁度赤になり、足を止めた。冷たくなった両手を擦り合わせていると、目の前を軽自動車が走った。そのせいで、冷たい風が体を襲う。

「寒っ」
『主様。お時間がきました』

知らない声。突如頭の中に響いた声に振り向く間もなく、視界は闇に包まれた。

ディマイオス大陸。
緑鮮やかな森の中。地には色とりどりの花が咲き、木の上では鳥がさえずっている。
日に照らされ淡緑に色付く森の中に、少女の姿があった。
少女は地面に座り、花を優しく摘み取っている。
鼻歌を交えながら花を摘んでいた少女の耳がピンと立った。その耳は獣のような白い耳。そして、スカートからは白い足と白い尾が覗いている。
少女は辺りを見回しながら耳を動かし、何かを見つけようとしていた。
すると、一点の方向を見つめ、摘み取った花を握ったまま、その方向へ走り出した。
辺りを気にしながら走り、周りよりも少し太い木の裏を覗いたとき、

少女は「あっ」と声を漏らした。
視線の先には、木にもたれ掛かるようにして少年が眠っていた。少女はまじまじと少年を見た後、正面からその顔を覗いた。そして口を開く。

「だぁれ？」

問いかけに応えるように、瞼がゆっくり上がった。

始まり〔1〕

彼は目を開けた。
黒曜石のような瞳で空を見る。視界に広がったのは黄色い天井。
ここは…？
火の光で辺りは明るかった。ぼんやりとしていた意識がはっきりしてきたことで、寝ている自分の体に何かが乗っているのに気づいた。
顔を少しあげてみると、足のところに少女が丸くなって寝ている。
そして彼は目を見開いた。
耳…なのか？
目を奪われたのは伏せられている白い耳。獣の耳を持つ少女をおこさないよう、体を起こそうとした。
が、思ったより体に力が入らず、足元の小柄な体を蹴ってしまった。
「うん…」
小さな声に彼はピタッと動きを止めた。「ふあぁ」と欠伸をし、目を擦りながら少女が起き上がる。
開いた青い瞳が彼を捕らえると、表情がぱあっと明るくなった。
「目が覚めたんだ！」
眼前にせまった少女に少し後退する。
「森の中で寝てたんだよ」

「森？」
「うん。カミアが見つけたの」
「カミア？」
「カミアだよ」

自分を指して言ったところから、「カミア」というのは少女の名前のようだ。
カミアは膝立ちになり小首をかしげた。

「あなたは？」
「えっ」
「あなたの名前は？」

そう訊かれ、答えようと口を開いた彼の動きが止まった。

僕の…名前？

どれだけ頭の中を探ろうとも、答えは出てこない。それ以上に恐怖が溢れてきた。

彼の中には何も無かった。

「僕は一体…」

呟いた言葉にカミアが首をかしげていると、部屋の大きなドアが勢いよく開かれた。
ドタドタという荒々しい足音と一緒に三人の男が入ってくる。

「カミア、身元の知れない者を城に入れたというのは本当か！」

先頭にいた金髪の男が叱るような口調で言った。

「もう、ケイト！」

カミアが頬を膨らませていると、一番後ろにいた茶髪の少年がおどおどした様子で前へ出た。

「申し訳ありません。バレてしまいました」

「ケイトのドジ！　約束したでしょ！」

「カミア、我が儘はよせ」

目の前の会話を、彼は呆然と見ていた。驚いたことに、カミアと話している二人にも獣の耳があるのだ。

金髪の男はカミアと同じ白い耳と尾。少年は茶髪より薄い色をした、ふわりとした耳と尾である。

「ひっ！」

急に右耳の辺りを触られ、とっさに右側を見れば、二番目に入ってきた緑髪の男が、彼の黒髪をあげて耳をじっと見ていた。そしてこの男にも獣の耳と尾。

「この子、獣族じゃないみたいだよ。魔族でもないし」

「それは本当か！」

そう言うなり、金髪の男は腰の剣を抜き、切っ先を彼にむけた。

「おい、お前は何者だ」

「いや、その…僕は…」

突然刃物を向けられ、混乱している彼の脳裏がフラッシュした。何もなかった頭の中に、ある文字が浮かぶ。

「神崎…神崎郁斗です」

「は？」

「僕の名前…です」

「カンザキ？　おかしな名だ。カンザキとやら、どうやって城に入った」

「城…？」

その言葉に彼…郁斗はぽかんと口を開けた。

「まさか、知らなかったとは言わせんぞ」

「はいその通りです」と言ってしまえば、目と鼻の先にある剣が牙をむく。そう判断した郁斗は何を言えばいいのかわからず、目を泳がせた。

そんな彼を助けたのはカミアだった。

「もう！　やめてよヴィル」

郁斗と剣の間に割り込み、男を睨む。

「さん付けで呼べと、何度も言っただろう」「意地悪なヴィルはヴィルでいいもん」

眉をピクピク動かし、今にも怒鳴りそうな男の肩を、緑髪の男が掴んだ。

「落ち着けよヴィル。冷静になれって」

「なんだ、お前から斬られたいか」
「お―恐っ。さっき言っただろう、この子は獣族でも魔族でもない。よく見ろ」
「なら一体…」

金髪の男は何かに気づいたかのように顔を上げ、郁斗を見た。次に何を言われるのかと思い、郁斗の体が固くなる。

「嘘だ。魔力が無いだと！？　それに黒の眼…」
そう、ありえない組み合わせだ」
「黒眼の人間…」

心底驚いた様子の男は剣をおさめ、踵を返す。

「とりあえず兄上に報告だ。それまでここを動くな。行くぞ、リィド」
「はーい。それじゃあね」

二人の男が部屋を出たことで緊張が解け、郁斗は大きなため息をついた。
静かになった部屋の中で、一番最初に動いたのはカミアだった。

「どうしよう、アズにみつかっちゃう」
「仕方ありませんよカミア様」

目の前でしょぼんと垂れている耳を見て、郁斗はカミアの頭を撫でた。

「よくわからないけど。僕のせいで迷惑がかかってるみたいだね」
「違うの。悪くないから」
今にも泣きそうなカミアの頭を撫でていると、茶髪の少年がベッドの側に立った。
「改めましてカンザキ様。僕はカミア様の従者、ケイト＝リガルと申します」
「あ、神崎郁斗です。別に「様」とかつけなくても…。名前で呼んでください」
「カンザキというのが名前では？」
「神崎は名字で、郁斗が名前です」
「不思議な名前ですね、イクト様は」
「いや、だから「様」は…」
ケイトは困ったように笑う。
「僕は従者の身なので。ではイクト殿でどうでしょう。僕への敬語は不用です」
ケイトは笑顔のまま言った。
これ以上何を言っても彼はきかないだろう。そう思った郁斗は頷いた。
どこか固い自分の呼び方に疑問をもったが、何も聞かないでおいた。
「それでは」ケイトが何かを差し出してきた。
「イクト殿が来ていた服を綺麗にしておきました」
そう言われ、郁斗は今自分が下着一枚の状態であることに気づき、

ケイトからひったくるように服をとった。

自信が着ていたという服を着た郁斗は困惑していた。

ここはどこなんだろう。
ここの人たちは皆、動物のような耳と尾があって、どうも違和感がある。
僕がそうじゃないからかな。
それより僕は？
自分がわからなくて…恐い。

「イクト、真っ黒だね」

カミアの声で我に返った。

「そうだね、カミア」

自分の姿を見て郁斗は同意した。黒の学ランに黒髪黒眼、まさにカミアの言う通り。

「そういえば、さっきの二人は誰？」
「ヴィルとリィドだよ。ヴィルは意地悪で、リィドは面白いの」「最初に入ってこられた方がヴィンセント様で、一緒におられたのがリィド様で…」

カミアの説明では郁斗が理解できていないと察したのか、ケイトが付け加えた。

ベッドのシーツを整えて郁斗を見たとき、その目が大きく開かれた。
「イクト殿…魔力が」
「へ？」
魔力？　さっきもそんなこと言ってたな。
訊こうとしたとき、部屋のドアが開いた。
そこに立っていたのは、ヴィンセントとリィド。
「おいお前、ついて来い」
「ヴィル！」
走り出そうとしたカミアをケイトが止める。
「ケイト、カミアをつかまえておけよ」
「はい…」
カミアとケイトにこれ以上迷惑はかけたくない。そう思った郁斗は、
「行くぞ」と言ったヴィンセントの後をついていった。
大きな廊下を歩く。ヴィンセントとリィドは背が高く、足も長いせいか、郁斗は二人の後ろを小走りに走っていた。
「どこへ行くんですか？」
「兄上のところだ」
「兄上？」
この人兄弟がいるんだ、と思っている郁斗に振り向くことなくヴィンセントが続ける。

「俺の名を聞いただろう。それで分からんのか」

はぁ、とため息をついて言ったヴィンセントの言葉に郁斗は絶句する。

「俺の兄上は王だ」

〔2〕

「お前がカンザキイクトか」郁斗はヴィンセントに険をむけられた時以上に、体をこわばらせていた。
通された場所は大きな空間。天井はガラス張りで光がよく入り、「神聖」という言葉がぴったり合う。
郁斗が見つめる先は壇上。そこにある大きな椅子に座った人物だ。
「私を知らぬようだから名乗っておこう。私は獣族の王、アスライト＝ベオ＝ランディーヌだ」
獣族の王、もといヴィンセントの兄は郁斗に微笑んで言った。
王と言えど、容姿は若い。
ヴィンセントと同じ金髪に白い獣の耳。しかし、短髪の弟とは対比に、兄は襟足まである。
温厚な雰囲気を醸し出しているが、どこにも隙をみせていない。
目を留められた瞬間、郁斗の体は直立してしまった。
「おい、何か言ってみてはどうだ」「は、はい！　神崎郁斗です！　あ、神崎が名字で郁斗が名前です」
ケイトのような勘違いをおこさないよう、きちんと名乗っておく。
「本当に魔力は微塵にも見られないな。見える魔力はその服からでている」
この服から？
学ランを見ていた郁斗の左側からヴィンセントが発言した。

「兄上、こいつが人間なわけないだろう」
「だが現に目の前にいる」
「こいつは黒眼だ。なら魔族だろ。しかも…」
「それはないわ」

ヴィンセントの言葉が遮られた。
初めて聞く声に振り向くと、柱の影から女が出てきた。
左に流れた朱の髪を揺らしながら、女はゆっくり近づいてくる。

綺麗なひと…。
けど、あの耳は…？

郁斗が目を留めたのは彼女の耳。郁斗と同じような形をしているが、それは長くとがっている。
近づいてきたかと思えば、少し腰を折って郁斗の顔を覗いた。綺麗だと思っていた顔が目の前に迫り、郁斗はドキリとした。

「眼の色は本物。けれど魔族じゃない。耳も全然だしね。突然変異の可能性もゼロ。今までの事例で人間との間にできた子供は全て魔族。それは獣族も同じでしょ」

女の言葉にヴィンセントが口を紡ぐ。

「じゃあシャリー、この子は人間なのか？」
「そういうことになるわね」

リィドにシャリーと呼ばれた女が頷く。

「それと記憶も無いそうだな」

「ふん。何も知らない顔して、何かたくらんでいるのかもしれん」
「そんな、僕は本当に…」
反発した郁斗の目先に、再び剣がむけられた。
「さあ、どうだか」
「ヴィル！」というリィドの声も聞こえてないらしいヴィンセントは、低い声で言った。
いやだ…！！
再び襲ってきた恐怖に郁斗が叫んだ。
その瞬間、キンッ――という金属音。ヴィンセントの手にあった剣が、少し離れた位置に落ちる。
何が起こったのか理解できていない郁斗を、全員が驚愕の目で見ている。
「えっと…今何が…？」
「魔力で弾いたようだな」
いたって冷静にアスライトが状況を把握する。
「何故人間が魔力を！」
「どうやら服にこめられた魔力は、彼を守るためにあるようだ」
会話に追いつけない郁斗はおろおろするばかり。
「カンザキイクト」
「は、はい」

アスライトに呼ばれ、小さく返事をする。
「お前を人間としてこの城で保護しよう」
「兄上！」
「リトビスを学ばねばならないからな、ヴィンセントの従者として居座れ」
それは郁斗にとって嬉しい話だ。記憶のないままどこかへ放られてしまうのでは、と思っていたところだったのだ。
このままじゃ、どうにもならないし…。
お世話になってもいいよね。
「はい、わかりました。よろしくお願いします」

「イクト、でいいんだっけ？」
「はい」
アスライトと話を終えた郁斗は今、ヴィンセントの部屋に来ていた。ソファに座り、隣のリィドと自己紹介をしている。
「俺はリィド＝マスイート。騎士団の副隊長やってんだ」
「騎士なんですか！　すごいですね」
「そんなに誉められてもなぁ。毎日忙しいんだぜ、隊長にこきつかわれて」
「隊長は誰なんですか？」

興味本意できいてみた事に、リィドは視線を上げた。

「あそこの仏頂面」

リィドの視線の先には、机で執務をこなしているヴィンセント。自分の中で一番恐い人に指定されている人物が隊長と知り、郁斗はソファの上を後退する。

「おいヴィル。イクトに説明することが山ほどあるんじゃないのか？」

「明日から6時に俺の部屋に来い。お前の部屋はケイトと同室だ」

顔を上げることなく言った言葉に、リィドがため息をついた。

「言うことはそれだけかよ」

すると、ヴィンセントは今まで書いていた紙を宙へ放した。床に落ちる既の所でリィドが拾う。

「あとはお前の仕事だ」

「面倒事は全部俺かよっ！　はいはいわかった、行こうイクト」

リィドについて部屋を出るとき、郁斗はふと後ろを向いた。数秒とかからないうちにヴィンセントが見返す。

「なんだ」

「あ、いや。明日からお願いします」

「言っておくが」持っていたペンを郁斗にむける。

「俺は兄上の命でお前を従者として扱う。それ以外は何一つ、お前

の存在を認めんからな」
「…はい」
郁斗は痛々しい視線を背に感じながら部屋を出た。

「なに気にすることないって」
廊下を歩きながら、リィドが郁斗を励ます。
先ほどヴィンセントの部屋を出てから、ずっと何かを考えている郁斗を見かねたのだ。

「あ、いえ。リィドさんってヴィンセントさんとは仲がいいんですか？」
「なんで？」
「いや、ヴィンセントさんのことを愛称で呼んでるから」
「まぁ、幼なじみというか。もうかれこれ２５年付き合ってるからなぁ」
「リィドさんていくつですか？」
「２５」
答えたリィドは郁斗をじっと見る。
「イクトは１３に見えるけどな」
「僕は１７！　…のはずです」
「１７？　見栄はりすぎじゃないか？」
「本当ですって！」

「ははっ！　そりゃわるかったよ」

気さくに笑うリィドにつられ、郁斗も少し笑った。
ここへきて、初めて笑顔になれた瞬間だった。

〔3〕

灯りが灯った薄暗い廊下を歩いていて、もう日が沈んでいたことに郁斗は気づいた。
そして、二人が来たのはとある部屋の前。

「ここは？」
「ケイトの部屋だ」

ドアを開けると、部屋の中にはベッドのシーツを整えているケイトがいた。

「イクト殿！」

郁斗を見たケイトの顔が晴れやかになる。小走りで駆け寄ってきた。

「聞きました。ヴィンセント様の従者をすることになったんですよね」
「うん。よろしくねケイト」
「僕も嬉しいです。イクト殿が城に残ってくれて」

ケイトは郁斗の右手を握り、上下に振る。よほど嬉しいのか、茶色のふわふわした尾が左右に揺れている。

「あ、そういえばカミアは？」
「あれから大泣きで…。泣き疲れて寝てしまいました」
「明日、ちゃんと謝らないとね。心配かけたみたいだから」
「おっとお前ら、喜びの再会はそこまでいいか？」

リィドが紙をひらひらさせて言った。

「あ、そうでしたね。説明お願いします」

「おう、いいぜ」

リィドは紙に目を落とすと、直ぐさま嫌な顔をした。紙一面に文字が綴られていたからだ。

「えーっと、無断に城内をうろつくな、見知らぬ者と口をきくな、面倒をおこすな、些細な変化も報告、俺の命令は絶対……だぁー！！　細けぇっ！！」

読んでいたリィドの声は次第に小さくなり、しまいには内容に苛ついたのか、頭をかきむしった。

「こんな内容だろうと思ったぜ。いちいち煩いやつだ」

「はは…。ヴィンセント様らしいですね」

苦笑いのケイトの隣で、明日からの仕事に心配を募らせている郁斗。

「まともな事は書いてねぇのか？　お、これか」

ある一文を見つけたリィドは郁斗に近づいた。

「動くなよ」と言って右手をかざす。

何が起こるのかと思っていた郁斗の目の前で、何かがパッと光った。

「よし、これでオーケーだ」

「え、何がですか？」

「見て下さい」

ケイトが持った鏡を見た郁斗は目を丸くした。黒眼だったはずの自

分の瞳は、紫に変わっていたのだ。

「俺の魔法で眼の色を変えさせてもらったぜ」

「ま、魔法！？」

「聞きたいだろうけど後回しにしてくれ。えっと次は…」

そんなぁ…！

「その服は常に着ること。後は、これだな」

リィドが何かを取り出した。それは、細いヘアバンドの両端に獣の耳がついたもの。

「それは？」

「まぁまぁ、つけてみろって」

ヘアバンドをつけられ、耳もつけられた。耳の中は空洞になっていて、そこに丁度郁斗の耳がはまる。

「…なんですかコレ？」

「イクトが人間だってバレないようにするためだ。それと尻尾」

ふわふわの茶黄色をした尾を手渡される。

なるほど、コレで獣族になりすますということですね。

でもなんか…すごい恥ずかしいんですが…。

すごくふわふわ…。てか本物みたい…。

そこまで考えて、郁斗にある恐ろしい考えが浮かぶ。

「あの、一応確認しておきたいんですが…。これはまさか本物…」
「安心しな。魔獣の毛でつくられた造りものだ。それよりそっちもつけてみろって」
リィドにいわれ、尾についたフックをズボンに引っかける。ケイトが持っている鏡を覗くと、眼の色も変わったせいか、郁斗は獣族になっていた。
「へーすごい」
「今、イクトが人間であることを知っているのは極限られた数人だけだ」
「どうしてですか？」
「最後に」
またもや放らかされ、今度ばかりは郁斗の眉が歪む。
「常識をつけろ。以上だ」
「常識…」
「そういうことで、俺は帰るな。明日から頑張れよ」
右手をひらひらさせながら、リィドは部屋を出ていった。
ほとんど投げやりですね…。
ガクンと項垂れた郁斗に、慌ててケイトが話しかける。
「イクト殿！　分からないことは僕に聞いて下さい。助けになりますから」
「ありがとうケイト。それでさあ」
「なんでしょうか？」
「今日はもう疲れたから、寝てもいいかな」

体力的にも…内面的にも…

〔4〕

郁斗がこの世界に現れて3日がたった。そして世界のことも少しずつ知っていった。
毎晩寝る前にケイトから少しずつ。

この世界、リトビスには大きく分けて大陸が3つある。
ディマイオス大陸、セガル大陸、フィライト大陸。
リトビスには魔法が存在し、生き物には魔力がそなわる。が、唯一魔力のなあ種族がいた。それが人間。

3つの大陸には主にそれぞれ、獣族、魔獣、人間が住んでいた。しかし、もうリトビスに人間は一人としていない。

「どうして？」
「それは…明日にしましょう。今日は長すぎましたね」

昨日言われてから、郁斗はずっと話の内容が気になっていた。
そのせいか、郁斗はいつも以上に失敗を繰り返していた。ガシャンッ

「熱っ！」

5つ目のコップが今割れた。5つというのは、郁斗がヴィンセントに「茶をいれろ」と言われる度に割ったコップの数。

ケイトに教えてもらっているときは、なんなくこなしているのだが、ヴィンセントがいるせいかどうもうまくできない。

背中に痛々しい視線を感じて振り向くと、「またか」と言わんばか

りの目をむけるヴィンセントの姿。その眉間に皺が寄る。
「ご、ごめんなさい！」
「もういい。片づけたらこれを届けてこい」
「はい…」
床に散った破片を集め、ヴィンセントが指した書類の束を抱えて部屋を出た。
一人になった男はため息をつく。
兄上はあれを監視するつもりで従者にしたんだろうが、これでは逆に目が離せない…。
やつは失敗ばかりして、俺の仕事を増やしているとしか思えん。

「おーい、ヴィル」

そこへ、入れ違いにリィドが入ってきた。
「随分疲れた顔をしているな。イクトは頑張ってるか？」
「どうだか。茶もろくに入れられない、腕力もない。全くもって使えん」
「そう言うなって。イクトだって一生懸命なんだしよ」
「どこか変わった様子もない。何も思い出さない。あいつの謎は深まるばかりだ」
ヴィンセントは頭をおさえ、もう一度深いため息をついた。
「で、そのイクトはどこに行ったんだ？」
「アッシュの所に行かせた」「アッシュ？　会わせるのか？」

「奴は研究にしか興味がない。別に大丈夫だろう」

ズボンに取り付けられた赤茶の尾を揺らしながら、郁斗はトボトボと廊下を歩いていていた。

「はぁ、またやっちゃった。ヴィンセントさん、すごく怒ってたし」

ふと、横にあった窓に映る自分の姿を見た。とたんに羞恥がこみ上げる。

その原因はこの耳と尾だった。

なんだろう。コレをつけてると凄く恥ずかしいんだよね。

付けたことあるのかな？

「もえ」って言葉が浮かぶんだよね。

すると、窓の下の方で小さな影が動いた。覗いてみると、下の庭にカミアとケイトの姿があった。

カミアが花を摘んでいるのを、ケイトが見ている。カミアは郁斗のことが余程好きなようで、休憩中はもちろん、仕事中にも姿を現しては郁斗にくっついていることが多々ある。

ケイトは耳と尾をこれほどかというほど下げ、謝りながらカミアを連れていく。

その度にヴィンセントは、今にも怒鳴りそうな気持ちを抑えているのがよく分かる。

自分を慕ってくれるカミアとケイトに会うことが、郁斗の心地好い時間になっていた。
ケイトに毎晩、いろいろと教わるのも楽しい。
次の休憩の時は外で遊ぼうか。そんなことを考えながら、郁斗は廊下を歩きだした。

〔5〕

書類の届け先は「第一研究室」となっていた。

リトビスで文字を見たとき、初めて見たはずなのに郁斗は読むことができた。

だが、不思議なことに書くことはできない。

文字を書けば、郁斗にしか分からない文字。

読み話しはできるが、書きはできない。郁斗の謎のひとつだ。

郁斗はポケットから城内の地図を取り出す。

ヴィンセントから渡されたこの地図は特別なもの。地図を広げると、赤い一点が灯る。これが郁斗の位置。

この地図は持ち主の現在位置を示してくれるものだ。

「えっと、第一研究室は…。あった」

目的の場所を見つけて歩きだすと、地図上の赤い点が動きだす。

これで迷子にならないですむ。

研究室って、何研究してるんだろう…

にしても、広くて長い廊下だなぁ

実は城内を一人で歩くのは初めてだった。
ケイトと使っている部屋とヴィンセントの部屋は同じ階にあり、さほど遠くない。
今まではヴィンセントの身の回りの仕事をしていたので、初めての城内に、郁斗は観察しながら歩く。

へぇ、やっぱり王様の住む城はすごいなあ。

壁の装飾は細かく、高貴な雰囲気が漂う。
途中でいくつもの部屋を見つけ、誰の部屋なのか考えていると、何かとぶつかった。

「わっ！」
「おっと！」

郁斗の手から書類が離れ、宙へ舞い上がる。
同時に郁斗は尻餅をついた。

「いたた…。あ、すいません！」

慌てて辺りに散らばった書類を集める。
すると、相手側も手伝い始めた。

「ほい、どーぞ」

ほとんど拾ったところで、相手が集めた書類を差し出した。

「ありがとうございます」

立ち上がった時、ぶつかった相手は郁斗と頭一つ分背が高かった。郁斗より少し年上だろう。

深い緑の髪に、薄い眼鏡をかけ、丈の長い白衣を着ている。そして、彼は獣族だった。

「ぶつかって悪かったな。前見てなくってさ」

「あ、僕の方こそ」

「見ない顔だな。新入り？」

「はい、3日前に」

「へぇ。それでどこに行くんだ？」

「第一研究室です」

郁斗が場所を告げると、彼は「おぉ」と言って郁斗の肩を叩いた。

「俺も今からそこに行くところだったんだ。丁度いいし、一緒に行

くか？」
「本当ですか！　助かります」
「堅苦しいなぁ。俺はオリバ。第一研究室で助手やってんだ」
「僕は郁斗です」

二人は研究室まで並んで歩いた。
その間に郁斗が自分の仕事場を教えると、オリバは目を大きく開いて耳を逆立てた。

「イクトってあの鬼隊長のところで働いてんのか。大変だな」
「鬼隊長…」

それがすぐにヴィンセントのことだと気づいた。
日頃から殺気に似た視線を浴びている郁斗には、ヴィンセントが鬼隊長と呼ばれる由縁がなんとかく分かった。

「まぁ、それなりに頑張ってます」

ほとんど失敗ばかりして、呆れられてるんですけど…！

内心ではそう叫びながら、郁斗は苦笑いをつくる。

「ここだぞ」

しばらくして到着した目の前には、他とは違って鉄のドアがある。

何の研究をしてるんだろう…

「先生、入りますよ」

二回ほどノックをして、オリバはドアを開けた。

「げっ！」
「わぁ…」

部屋とは思えないほど汚い光景に、オリバは顔をひきつらせ、郁斗は口をぽかんと開けた。

「2日来なかっただけでこの有り様かよ…」

オリバは「先生！」と言いながら、足の踏み場もない部屋に入っていく。
後に続いて郁斗も足を踏み入れる。

「先生ぇ。生きてますかー？」

ガラガラッ

奥のごみが盛り上がったかと思うと、その中から人影が現れた。
そこには、ボサボサな明るい茶髪の女。そして彼女は、魔族。

確かケイトが言ってたなぁ。
獣の耳と尾をもつのは獣族で、構造は人間と同じだけど、長い耳をもつのが魔族だって。

「オリバ…」
「先生！　また散らかして！　２日俺が行かなかっただけでこの有り様ですか！」

オリバは両手を腰にあて、叱りつけるように言った。
女は全く動じず、下に隈ができた目を擦る。

「オリバ、この人は？」
「ああ、研究にしか興味のない俺の上司、アッシュだ」

郁斗の存在に気づいた女、アッシュは「お前…」と呟いて、郁斗を凝視する。

「先生、こいつイクト。先生に用事があるんだと」
「これ、ヴィンセントさんからです」

書類を差し出すと、彼女は何故か受け取らず、頭をひねる。

「ヴィンセント…？　あぁ、ヴィルからか」

あれ、この人ヴィルって呼んだ

ヴィンセントのことを愛称で呼ぶ者は少ない。愛称で呼んでいるということは、それほど親しい間柄なのだ。

郁斗は頭の中でアッシュをヴィンセントと同じ位に位置付けた。

けど、今忘れてなかった？

「オリバ、早く部屋を片づけろ」
「えぇ！」
「私の助手。それがお前の仕事だ」

小さく舌打ちをして、オリバが部屋の奥へ進む。
入れ替わりにアッシュが郁斗に近づいてきた。

「ほう、人間は初めて見たな」
「！？　どうして…！」

思わず叫んでしまいそうになった口を、アッシュが右手で押さえる。

「オリバに聞こえるぞ」

小声で言うと、先ほど受け取った書類をポイと捨ててしまう。

「これは興味を注がれるなぁ。私はリトビスについて研究している。今は亡き人間を調べてみたいと思っていたところだ」

ニヤリと笑みを浮かべながら顔を近づけてくる。
声を出せない郁斗はバレてしまったことと、調べてみたいと言ったアッシュの言葉に目を見開くばかり。

「っておい、そんなに怯えた顔をするな」

解放した右手で郁斗の額を突く。

「あの、どうして僕が…」

「そんなもの、見ればわかる」

そんな簡単にバレちゃってたの…！？

驚きを隠せない郁斗にアッシュが続ける。

「イクト、お前また来い」

「え？　それは…」

「うん、そうだな。私の研究に付き合ってくれれば、見返りとして私の研究資料を見せてやろう。高いぞ？」

郁斗はドキッとした。

アッシュさんはリトビスの研究をしてるってことは、きっと物知りな人だ。

郁斗は記憶がない。

だから、自分の記憶を呼び戻すより先に、この世界のことを知ろうとした。

が、ケイトには何度か話を放らかされたことがある。

それは話しにくいことなのか。だとしても、今の郁斗には知る手だてがない。

アッシュなら容易く教えてくれそうだ。

心が揺れる。

「先生！　手伝ってくださいよ！」

「あぁ」

最後に「待ってるぞ」とだけ言い、アッシュはゴミ山の中を歩いていった。

〔6〕

研究室からの帰り道。

「男勝りな人だったな…」

アッシュの言葉が頭に響く。

今の僕には知ることが必要だ。それが自分を知ることが手がかりにもなると信じて。

角を曲がろうとしたとき、知った声が聞こえて足を止めた。
そっと覗くと、アスライトとヴィンセントが立っていた。

「それであっちはどうですか」
「特に変わった様子はない。奴らの情報もつかめてないしな。イクトはどうだ？」
「あいつ、全然と言っていいほどに無能ですよ」

郁斗の胸がチクリと痛む。

「記憶が戻った様子もない。兄上、このままでいいんですか？」

「奴らと関わりがあるやも知れんからな。まだしばらくは様子を見よう。今度ルシフィエルと会うことになっている。その時にまた今後のことを決めよう」

二人が去った後。
郁斗は未だにその場所を動けずにいた。
急に込み上げてきた孤独感。鼻の奥がつんとする。

奴らって誰？
僕はただの厄介者？

この世界で、僕はあまりにも無力だ。

「ねぇケイト、昨日の続きを話してよ」

その晩、郁斗はベッドの上でケイトに話しかけた。
ケイトも自分のベッドに腰かける。

「…そうでしたね。では話しましょうか」

ケイトは一瞬表情を曇らせたが、ゆっくり口を開いた。

「リトビスの人間は、全員ある集団によって消されました」
「消された…？」
「１０年前、赤月の宵（イェ・ダウム）という集団が現れ、禁断魔法で強大な魔獣をつくりだしました。その禁断魔法というのが、人間の命を媒体としたものです」
「命を使って…？」
「獣族も魔族も魔力をもっています。様々な魔力が混合するよりも、魔力をもたない人間を使って、純粋で強い魔獣をつくろうとしたのです」

鼓動が速くなるのを感じた郁斗は、自分の胸元をおさえる。
話を聞いているだけなのに、感情が揺さぶられる。

「そしてあの日、リトビスから人間が消えました」

消えた。
郁斗の中に恐怖が渦巻く。

「魔獣が現れてから、リトビスを黒雲が包み、不気味な赤い月がありつづけました」

ケイトの声が小さくなる。
１０年前となればケイトも経験したのだろう。思い出したくなくて放らかしたのだ。

「ごめん」

郁斗は謝っていた。

「いえ、イクト殿が何故謝るのですか」
「だって、僕が嫌なこと思い出させたから」
「もう済んだことです。リトビスは平和ですよ」

けれどいたたまれなくて、郁斗は俯いたままだった。
そのせいか、ケイトの言葉を聞き取れなかった。

「今度は何も起こらなければいいのですが…」

〔7〕

晴れやか日差しが庭に降りそそぐ。
実に心地好い日。

「イクトー！　できたよ！」

若草が生い茂る庭に座っている郁斗に、カミアが花の冠を差し出す。

「上手だね。のせてあげるよ」

郁斗は花の冠をカミアの頭にのせた。カミアはその場で嬉しそうにくるくる回ってみせる。

「かわいい？」
「うん。すごく」
「ふふっ。みんなに見せてくる！」

駆け出したカミアを微笑ましく見ていた郁斗が立ち上がると、ケイトが近づいてきた。

「ありがとうございます、イクト殿」

「別にいいんだよ」
「仕事をされていたのに、カミア様のわがままで」

それは数分前のこと。
ヴィンセントの部屋で書類整理をしていた郁斗。するとカミアがやってきて離れなくなったのだ。
「遊ぼ！」を連呼するカミアを見かねたヴィンセントが二人を部屋から出し、今に至る。

「そういえばさ、カミアってアスライトさんの子ども？」
「いいえ、王は結婚していませんよ」
「それじゃあ両親は？」

郁斗がまずいと思っている時には遅かった。
表情を少し曇らせて、ケイトが話す。

「カミア様のお母様、ルミア様は王の姉です。つまり、アスライト様やヴィンセント様とは、姪と伯父の関係にあたります。王族特有の白い耳と尾が、そのあかしです」

確かに、あの二人も白かったような…
にしても、姪かぁ。だからヴィンセントさんをヴィルって呼んでたんだ

「ルミア様はもともとお体が弱く、出産時に…。お父様も流行り病で数年前に…」

親がいない。
カミアの性格からは考えつかないことに、郁斗は動揺する。
あの年頃で両親がいないというのは、とても悲しいことだ。ショックで、口をきくこともできなくなるかもしれない。
だが、カミアはとても表情豊かだ。
それなのに、親がいない。
安易に聞くべきじゃなかった。

「幼い頃からお世話をしていた僕が、一緒にこの城へ移りました。でもカミア様はショックで心を閉ざしてしまって…。でもイクト殿を見つけたあの日から、表情がとても豊かになりました。イクト殿には感謝しています」

頭を下げたケイトに郁斗が慌てる。

「そんな、僕はなにも…」
「それでは、僕は部屋の掃除をしてきますので、カミア様のことお願いします」

ケイトは城へ戻ってしまった。
すると、入れ違いでカミアが駆けてくる。その手には花の冠がもうひとつ。

「イクトのもつくってあげたよ」
「僕のも？」
目線を合わせるようにしゃがむと、カミアが冠を郁斗の頭にのせた。
そして「いいこ、いいこ」と言いながら頭を撫でる。
「イクトもこうやってくれたんだよ」
「僕が？」
身に覚えのないことに、郁斗は首をかしげる。
「うん。お花の冠の作り方も、教えてくれたんだよ。その時にね、カミアはいいこだから、笑顔でいるのが一番なんだって」
はて、そんなことを言っただろうか？
たった４日間の記憶を探っても、それらしきものは見あたらない。
「そうだ！　お城の人に見せたら、これくれたの」

カミアの手には、赤い風船と細い糸。

「イクトつくって」
「いいよ」

自分に膨らませられるのか心配したが、思ったよりたやすく風船は膨らんだ。
「わぁ」とカミアが喜ぶ。
ある程度まで大きくすると、くちを糸で結んだ。

「どうぞ」
「ありがとう！」

嬉しさのあまり走り出したカミアは、すぐのところで転んでしまった。
郁斗が慌てて駆け寄ると、小さな手から風船が離れる。

「ああ！　風船！」

風船は高くのぼったかと思うと、風にあおられ、近くの木に引っかかった。
立ち上がったカミアは物欲しそうに見上げる。

「イクト…とれる？」

上目遣いで訊かれ、拒否することはできなかった。

「やってみようか」

「本当！」

郁斗は頭上の冠を地面におき、木に近づいた。枝を掴んでみるものの、枝は細く、体重をかけてしまえば簡単に折れてしまうだろう。

どうしようか…

郁斗はもう一度、木の上の風船を見上げる。

風でも吹いて、勝手におりてこないかなぁ…

ありもしないことを考えていた郁斗の目が見開く。

風も吹いてないのに、風船が木から離れ、ふよふよと目の前におりてきたのだ。

「ほ、本当におりてきた」

「イクトすごい！　本当にとれた！」

「う、うん…」

なんだろう今の。勝手に風船が…

すると、背後でザッという草を踏む音が聞こえた。
振り向くとそこにいたのは赤髪の女。
郁斗がアスライトと初めて会ったとき、突然現れた女だった。

「おいお前」
「はい？」
「今ここに、他に誰かいたか？」
「ここはカミアとイクトだけだよ」

女は顎に手をそえ、「気のせいだったのか？」と呟く。そして郁斗を見た。
鋭い目に見つめられ、郁斗の体がはねる。まさに獣のような目だ。

「ふん、邪魔したな」
「あ、あの！」

踵を返した彼女を呼び止める。

「話をしたいんですけど」

「私とか？　私はお前と話すことはない」
「僕があるんです」

女は小さなため息をつくと「わかった」と一言言った。

「カミア、悪いけどケイトのところへ帰れる？」
「もう遊ばないの？」
「ごめん、お話があるんだ。終わったら会いに行くから」

返事を渋るカミアだったが、郁斗がもう一度名前を呼ぶと「うん、わかった」と小さく言った。

〔8〕

「で、話とはなんだ」

女と二人きりになった郁斗は緊張していた。
あの時の、アスライトを前にしたときの感覚。それに似ていた。

「あ、あの。あなたは僕について何か知りませんか」

王室で一緒にいた彼女だ。
城の中でも郁斗が人間であることを知っている数少ない一人だ。
ともあれば、郁斗の今おかれている立場。それに、郁斗の知らない事を教えてくれるかもしれない、と思ったのだ。

「おかしな事を訊く。お前は自分の事を知らないのか」
「生憎、僕は僕の事がわかりません。でも、僕が人間だと知っているあなたなら、僕が知らない事を知っている。例えば、黒眼を隠さなきゃならない理由」

表情を変えることがなかった女が、郁斗を見てクスリと笑った。

「イクトといったか。お前、鈍感で能天気に城で日々を送っているのかと思ったが、以外に頭が冴えるようだ。気が変わった。答える

ことのできる範囲でなら教えてやろう」
「え、急になんで…」
「気に入ったからだ、お前を。リトビス唯一の人間。私の名はシャリー・シプトン。好きなように呼べ」

先程までピリピリとしたオーラを放っていた女、シャリーの雰囲気がガラリと変わり、郁斗の肩の力が抜ける。

無愛想な人かと思ったけど、本当は親しみやすい人なのかな…

「で、何が聞きたい？」
「あの、魔力って誰にでも見えるんですか？」

それは昨日のこと。アッシュに会ったときだ。
オリバはなんとも言ってなかったが、アッシュは一目郁斗を見ただけで人間だと気づいた。
それを疑問に思ったのだ。

「鍛練した者ならば見える。そういった類いの者にならバレるかもしれないな。安心しろ、その魔力を纏った服を着ていれば多少は気づかれん」
「それって、アッシュさんはすごい人なんですか？」
「会ったのか。変わったやつだろう」

淡々と話していたシャリーはじろりと郁斗を見る。

「…本当に訊きたいのはそんなことじゃないだろう」

「あ、そうでした」

今思い出した様子の郁斗にシャリーはため息をつく。

「お前が黒眼を隠さなければならない理由か…。それは黒が魔族の王の証であるからだ」

「お、王！？」

これまた突拍子もない話に顔をしかめる。

「だがその血は途絶えた。１０年前の事は聞いたか？」

郁斗が頷くとシャリーは「そうか」と、目を伏せて言った。それは郁斗を哀れに思っての表情だろうか。それとも過去の悲しみを思ってのものか。郁斗にはわからなかった。

「１０年前、奴らの手によって当時の王は殺された。そして、最後の王も戦いで命を落とした。まだ成人してもない子どもだったのに…」

話を聞いている間、郁斗は胸の内が熱くなっていた。
この感情は悲しみ、悔過。
どうも他人事でないような気がしてならなかった。

「王の血が絶った今、証である黒眼を晒すのは危険きわまりない」
「あの、王がいないのなら、今どうなってるんですか？」
「少年王の遺言で、側近の二人が後をこなしている。周りの貴族からは、別で新しい王をたてるべきだ、と騒いでいるがな」

魔族最後の王。どんな子だったのだろう。
そんなことを考えていた郁斗は、自分がとても思い詰めた表情をしていたことに気づかなかった。

「おい、顔が青いぞ」
「すいません…」
「別にお前と関係があるとは言ってない。ただの昔話だ」
「そうですけど」
「今日はここまでだ。私は訓練に行く」

シャリーが去った後も、郁斗は冷めない胸の熱をおさえようとしていた。

〔9〕

魔族の王、かぁ…

郁斗は城内の廊下を歩きながら、先程のシャリーの話を思い出していた。
１０年前の事。
そんなにひどい状況だったのか。
話すケイトとシャリーの表情は、とても悲しそうだった。
しかし、郁斗が一番気になっていたのは、少年王のことだった。

シャリーさんは関係ないって言ってたけど、違う気がする。知ってるような、知らないような。
うーん…

自分の考えていることが整理できず、頭の中が混乱してきた時。鼻をつんと刺す匂い。

「うっ！　焦げ臭い…」

目を上げると、先の部屋から真っ黒な煙が出ているのに気づいた。
慌てて中を覗いてみると、そこは調理室のようで、煙があがる調理場の近くで、少女がおろおろしていた。

「どうしよう！　焼きすぎちゃった！　どうにかしなきゃ…！！」

少女は錯乱しているようで、動き回る度に肩まである緑の髪が揺れる。

盆を使って煙を払った。

「大丈夫！？」

見ていられなくなった郁斗が声をかけると、少女が振り向く。

「煙出てたけど…」

「ごめんなさい。私、クッキーを焼いてたんだけど、焼きすぎて…」

少女の視線の先には、もはやクッキーとは呼びがたい、炭のように真っ黒な物体。

「あらら…」

「また作りなおさないと。1時間かかったのに」

「僕でよかったら手伝おうか。2人の方が早いだろうから」

「本当！」

少女が嬉しそうに笑う。

「じゃあお願いするわ。私はリューン」
「僕は郁斗」

リューンを手伝うことになった郁斗は、彼女の言われたことを手伝えばいいと思っていたが、今、自分の手の動きに驚いていた。

「イクト、手際いいね。作ったことあるの？」

今、イクトは一人でクッキー生地を作っていた。不思議なことに、次に何をすればいいのか、何を混ぜればいいのか。手順がわかるのだ。今も楕円形に生地を丸めている。

「ある…のかな？」
「なんで疑問？」
「よく覚えてなくって。でも少しだけ…」記憶の欠片を繋げる。
「僕が、作ったクッキーが焼けるのを待ってると、香りに誘われて来て、僕と一緒に焼きあがるのを待ってるんだ。尻尾をずっと左右に振って。焼きあがるといつも一緒に食べて、おいしいって吠えて――」

『ワン！　ワン！』

郁斗の脳裏がフラッシュし、吠え声が響いた。

コタロー……？

動きが止まった郁斗をリューンが覗き込む。

「イクト？」止まった郁斗の顔を見ていたリューンが声をあげた。

「あ――――っ！！」

その声に我に返る郁斗。気づけばリューンが自分を指で指していた。

「思い出した！　イクトってヴィンセントさんの従者してるんじゃないの？」

「う、うん。知ってるの？」

「お兄ちゃんから聞いてたの。ヴィンセントさんに従者がついたって」

彼女の兄に覚えがない郁斗は首をかしげる。

「私のお兄ちゃん、副隊長してて、リィドっていうの」

リューンの笑った顔がリィドと重なる。

「えっ！　リィドさんの！？」
「うん、妹」

本当、笑顔がそっくりなことに郁斗は驚いた。

「気づかなかったよ」
「私も、今思い出したの」

思わぬことで話が弾み、着々とクッキーは作られていった。
郁斗もいつの間にか先程の現象を忘れていた。
そして数十分後。

「できたよ」
「わぁ！」

二人の目の前には、小さなバスケットに山盛りのクッキー。リューンが顔を近づけ、匂いをかぐ。

「いい匂い。１つもらっていい？」
「どうぞ」

一枚口にふくむと、その表情が明るくなる。

「おいしい！　イクトすごいよ」
「ありがとう。で、これは誰にあげるの？」
「カミアちゃんよ。昨日クッキーが食べたいって言われて。これなら大喜びしてくれそう」
「カミア？　じゃあ僕も行っていいかな。これから会うつもりだったんだ」
「もちろん。行きましょ」

リューンはもう一枚クッキーを口へ放った。

カミアは部屋のソファの上で、クマのぬいぐるみを抱いて、寝転がっていた。

「ケイトー。イクトはまだかな」
「シャリーさんとお話されているのです。しばらくは我慢しましょう」

棚の上を掃除しているケイトが答える。

「リューンも、クッキー持ってきてくれないし」
「もう少しすれば来ますよ」

ケイトがそう言ったとき、ドアがノックされた。

「カミアちゃん。クッキーできたよ」

入ってきたリューンと郁斗に、ふてくされていたカミアはすぐさまソファから降りた。

「イクトとリューンが一緒に来た！」
「はいカミアちゃん。クッキーだよ」
「わーい！」

バスケットをカミアに手渡していると、ケイトが近づいてくる。

「二人ともどこで一緒になったんですか」
「うん、調理室でね」
「おいしい！」

カミアが大きな声で言う。
バスケットを受け取ったままクッキーを頬張っていた。

「リューン、上手になったね」
「それ、実はイクトが作ったの」
「イクトが？　すごい！」

カミアが目を輝かせていると、横からケイトが一枚取った。

「おいしいですね。イクト殿が料理上手だとは」
「いや、自分でもよくわからないんだけどね」
「お、なにかいい匂いがするなぁ」

別の声が聞こえ、振り向くとドアの前にリィドが立っていた。

「あ、お兄ちゃん」
「クッキーか、俺にもくれよ」

カミアが「はい」と差し出す前に、長い腕が伸びて一枚取った。

「お、イケるな。リューンお前か？」
「残念、それはイクトが作ったの。って、これ二回目じゃない」
「へぇ、以外な特技発見だな」
「作ってるところを見てたけど、全く無駄がなかったのよ。あれは熟練の技よ」

話している兄妹を見て、郁斗は本当に似てるなぁ、と思っていた。
髪の色はもちろんだが、雰囲気や性格がどことなく似ている。

兄妹かぁ。なんかいいな

その時、別の足音が聞こえた。

「おい、煩いぞお前ら」

部屋の熱を一瞬にして冷ましてしまうような低い声の主、ヴィンセントが立っていた。
鋭い目がじろりと郁斗を見た。

「お前はこんなところで遊んでいたのか」
「いや、そうではなくて…」
「ヴィルー！　お前も食うか？」

そけへリィドが割り込んできた。冷徹なヴィンセントに、こう安々と話しかけるのは彼くらいだろう。

「なんだそれは」

「イクト特製クッキー！　お前菓子好きだろ」

えぇっ！　ヴィンセントさんがお菓子好き！？

以外な好みに心の中で叫ぶ。

「ふん。誰がそんな…」

「突っ張らなくてもいいんだぜ。ほら、尻尾揺れてるぞ」

リィドが揺れる白い尾をニヤニヤ笑いながら見た。

「！！　お前はっ……ングッ！」

怒鳴ろうとしたのだろう。大口を開けた瞬間、リィドがクッキーを押し込んだ。

その光景に郁斗はドキドキしながら様子を伺う。

「感想は？」

リィドに訊かれ、ヴィンセントは小さくぼそっと「…うまい」と言った。その言葉にほっと胸を撫で下ろす。

これで少しは距離が縮まっただろうか、と思う郁斗だった。

閑話：郁斗の呟き

僕が城に来て、２週間がたった。

僕は相変わらずヴィンセントさんの従者をしています。まあ、空回りしてばかりだけど。
時折刺さる視線が怖くて…。

あの日、僕のクッキーを食べてからのヴィンセントさんは、少し僕に対しての態度が変わりました。
刺々していたオーラも丸くなったかな。
お菓子好きなのは本当のようで、２日に一度は僕にクッキーを頼んできます。

僕に頼み事をしてくるヴィンセントさんの表情がひきつってるのが気になるけど…。
うーん、餌付けと言った方がいいのかどうか。

ヴィンセントさんからな仕事が無いときは、アッシュさんの研究室で過ごしてます。

アッシュさんはリトビスの全てを研究していて、凄く物知り。本当に幅広い知識を持っています。
けれど、研究熱心なせいか人の事を覚えるのは苦手なよう…。僕の事も覚えてくれるのに１週間かかりました。
その上自由気儘な人で…。
勉強しに通ってるんだけど、今日は気が向かないからって、教えて

くれないこともしばしば。
行くたびに、オリバは僕に愚痴をこぼしてます。
まぁ、オリバも長いこと助手をやってるみたいだから、大変だと思う…。

ともかく、ここでの生活に慣れてきました。
カミアもケイトも、みんないい人で…。

肝心の僕は…一向に変化がない。
記憶がもどらない日が続いていて、正直不安だ。もしかしたらこのまま、自分が誰なのかわからないまま過ごしていくのだろうか。記憶がないというのは、本当に恐い。

僕は異分子だ。
いないはずの人間で、いないはずの魔族の王の目を持つ。

一体僕は誰なんだろう…
何故リトビスにいるんだろう…

不安は消えない。

〔１０〕（前書き）

今回からちょっと長めに書いてみましたＶ（＾－＾）Ｖ

〔10〕

「おっすヴィル。報告書持ってきたぞ」

ヴィンセントの部屋に来たリィド。ヴィンセントはいつものように執務をこなし、近くのテーブルでは郁斗が書類の整理をしていた。

「おはようございます、リィドさん」
「おぅイクト、今日もやってるなぁ」

郁斗とリィドが挨拶をかわしていると、再びドアが開いた。

「イクトいる？」

入っていたのはリューン。どうやら郁斗に用があるようで、姿を見つけるなり飛びついた。

「ねぇイクト、町に行かない？」
「町？」
「イクトはこんな大きな町、初めて来たんでしょ。だったら遊びに行こうよ」

確かに、郁斗は城の窓から見える町に興味をもっていた。行きたい気持ちはあるが、横目でヴィンセントを見る。

「駄目だ」

案の定、郁斗より先にヴィンセントが答えた。

「えぇ、なんでヴィンセントさんが？」

その理由を郁斗はわかっていた。
郁斗は人間で、今城で保護されている身だからだ。
その事を知らないリューンは頬を膨らませる。

「あのなリューン、イクトは忙しくてな」
「あらお兄ちゃん。いたの」
「っておいおい、今さらかよ…。イクトにも色々とあるんだって」
「でもそれってヴィンセントさんの都合でしょ。イクトには関係ないじゃん」

兄妹が揉め合っていると、またドアが開いた。

「イクト遊ぼ！」
「カミア様！」

カミアが入り、その後を追ってケイトが入る。カミアは一直線に郁斗のもとへ。
そしてリューンがいることに気づく。

「リューン何してるの？」
「イクトと町へ遊びに行こうって話をしてたの」
「町に！」
「けど、ヴィンセントさんが駄目って言うの」

それを聞いたカミアは目を輝かせてヴィンセントを見る。

「ヴィル！　私も行きたい！」
「お前はもっと駄目だ」
「私も行きたい！」

カミアが叫ぶとヴィンセントは頭を抱え、「今日は何故こんなにも…」と呟いた。
いつもならヴィンセントと郁斗しかいない静かな部屋が、今は人も多くがやがやとしている。
耐えられなくなったヴィンセントが叫ぼうとしたそのとき、

「私がお守りをしてやろう」

また新たな声が加わった。皆の視線の先、ドアにすがっているシャリーがいた。

「シャリー、お前か」
「ヴィルに劣らない腕をもつ私が同伴ならかまわんだろう」
「最近お前、イクトの肩をもつようになったな…」
「ん？　さあな」

口角をあげたシャリーを見て、ヴィンセントは大きくため息をついた。

「…いいだろう。行ってこい」
「本当ですか！」
「やったぁ！」

カミアとリューンが大喜びしている後ろで、堅物なヴィンセントが易々と許可したことに驚くリィド。

「じゃあヴィル。便乗して俺にも休みを…」
「あ？　お前に休みなどあるか」
「えぇーーー！　リューン、哀れなお兄ちゃんに土産を頼むよ」
「それなら自分でお金用意してね。もちろん、おつりはもらうから」
「うわっ！　ひでーぞリューン！」

項垂れるリィドをよそに、「カミアちゃん、出掛けるための服決めよっか」と言って、リューンとカミア、そしてケイトが部屋を出た。

「シャリーさん、ありがとうございます」

やっと静かになったところで、郁斗がシャリーに言う。

「イクトも羽根を伸ばさないとな。ずっとヴィルの側だと疲れるだろう」
「実は町に行ってみたいと思ってました。嬉しいです」
「お前ら、くれぐれも面倒はおこすなよ。特にイクト、お前はな」

念を入れられ郁斗は頷く。

「なんか、ヴィルも丸くなったなぁ」
「なんだと？」

ヴィンセントに睨まれたリィドは、「何でもありません」と目を反らした。
いつもの光景にクスクスと笑ってしまう。
しかし、そんな楽しい時間は終わりを告げようとしていた。

「イクト！　こっちこっち！」
「早く早く！」

只今、郁斗は絶賛振り回され中である。

「ちょっ！　２人とも…！」

町へ来た郁斗たち。ゆっくり町を案内してくれるのかと思いきや、あっちへこっちへ、カミアとリューンが走る。
カミアは王族の証である白い耳と尾を隠すため、大きな帽子と薄手の大きな上着を着ている。

「イクト、ここだよ」

２人に連れてこられたのは、とある店の前。硝子の向こう側には、装飾品や小さな置物がならんでいる。

「小物店かな」
「ダメ！」

店に入ろうとした郁斗はカミアに止められた。

「イクトは外で待ってて」

「え？」

「そうよ。私たちが買い物してくるから、外で待ってて」

それだけ言うと、２人は店へ入る。呆然としていると、そばをシャリーが通った。

「安心しろ。カミア様は私がついている」

「あ、はい」

御守り、ではなく護衛の為に同伴した彼女は、カミアのそばにいなければならない。

ふぅ……。なんだか疲れたな

やっとのことで解放された郁斗は近くのベンチに座った。

「イクト殿、お疲れのようですね」

そこへケイトが来て、隣に腰かけた。

「もう。ケイトとシャリーさんは見てるだけで…」
「カミア様とリューンが随分と楽しそうだったもので」
「そのかわり、僕はくたくただよ」

落ち着くことができた郁斗は改めて町の様子を見渡す。
エルガは城もあってか、大きな町だ。店も多く、人も多い。とても賑わっている。

しかし、郁斗には気になることがあった。
所々で町の修復作業をしているのがみられるのだ。

「ねぇケイト、どうしてこんなに町をなおしてるの？」

「あ…」どうしてかケイトは目を泳がせる。「まだ話してなかったですね」

郁斗は聞いていはいけないことだったのか、と悔やんだ。あの日の夜と同じような表情をケイトがみせたからだ。

「実は、イクト殿が現れた1週間前。赤月の宵がエルガ（イェ・ダウム）に現れたんです」
「えっ！？　もういなくなったんじゃないの？」

話を聞いたあの夜から、赤月の宵という集団は壊滅したのだと思っていた。

「はい。…首謀者と集団の何人かが殺され、ほぼ壊滅したものと」

ケイトは周囲を見回し、小声になって話す。

「ですがその日、エルガに現れ、復活を見せつけるかのように町を破壊していきました」

郁斗は唾を飲んで身震いした。

周囲は人で賑わっているのに、2人のいる空間だけ温度が低いようで、肩を縮ませる。

「今はだいぶ落ち着いてきて、町も元に戻ってきました。皆、本当は恐いんです。でも、恐いままじゃ何もできないですから」

そう言って笑ったケイトの表情は固かった。

郁斗は辺りを見る。

この人たちも皆、恐怖と戦ってるんだ…

自分は浅はかだ。そう思っていた郁斗をケイトが心配そうにのぞく。

「大丈夫ですか？」

「う、うん。何かごめんね、ケイトには辛いことを思い出させてばかりで」

「そんなことはないですよ」

「僕も、何かできればいいんだけど…」

目を伏せて俯くとケイトが否定するように言う。

「いいえ。イクト殿には十分良くしてもらってます。イクト殿が来てくれてからの日々は、随分楽しいです」

ケイトは笑ってくれたが、どうにも居た堪れなかった。

「イクト！」

可愛らしい声が郁斗を呼んだ。顔をあげると、カミアが何かを持って駆けてきた。

「どうしたの？」

「はい、コレ」

小さな手に握られていたのは、シンプルな銀のネックレス。

「僕に？」

「うん！　イクトへプレゼント」

「カミアありがとう」

ネックレスを受け取っても、大きな青い眼は郁斗のことをじっと見ていた。

ん？　どうしたんだろう…

どうしたのかわからないでいると、カミアごしにリューンとシャリーの姿を見つけた。

リューンが郁斗のネックレスを指差し、両手を首の後ろへ回し、何か口パクで言っている。

つけろってことかな…

「カミア、つけてもいい？」

「うん！」

ネックレスを首にかけて留める。ひんやりとした金属の感触。

「ありがとう。大事にするよ」

礼を言うと、少女は満面の笑みを浮かべた。その笑顔につられて笑う。

すると、どこからか歓声が聞こえてきた。それは近くの広場からだった。

「なんだろう」

「見世物やってるみたいよ」

「わーい！　行く行く！」

見世物と聞いたカミアが喜び、郁斗の手を引いた。

広場には多くの人が集まっていた。その中心に、魔族と獣族の二人組が立っている。

「さあ！　俺たちカッザムとトミシクのショーも盛り上がってきたぜ！」

魔族がカッザムといい、獣族がトミシクというらしい。

人の輪の一番外側に着いた郁斗たちだったが、前は大人ばかりで、カミアは見えないのかその場でジャンプをしている。

「…見えない」

ふてくされていたところをケイトが軽々と肩に乗せた。

「これでどうですか？」

「見える！　ありがとケイト」

まさかケイトにこんな力があったとは…。と一人で目を丸くしている郁斗を見て、リューンとシャリーがクスリと笑った。

ショーが始まった。

カッザムが一気に5つの球を操る。隣からトミシクが2つ球を加えても、ぶれる様子はない。

観衆から声があがる。

トミシクが黒い箱を取り出した。中を見せ、何もないことを皆に確認させると、それをカッザムの前へ差し出した。

7つの球は高くあげられ、吸い込まれるように箱に入る。そしてトミシクが中に手を入れると、1つの大きな球が出てきた。

それはまるで、先ほどの7つの球が1つになったかのようで、歓声がわきたつ。

「すごい！　どうやったの？」

「カミア様、知らないほうが良いこともあるのですよ」

皆が喜ぶ中、郁斗一人は訝しげにカッザムの持った球を見ていた。

なんだろう…この嫌な感じ

「さあ皆様！　余興はこれまで。お楽しみはこれからです！」

そう言ったカッザムが高く球を投げ上げた。

「そう…これからだ」

その瞬間、球が爆発した。
すさまじい爆音に歓声が叫喚に変わる。

「きゃあっ！！！」

悲鳴をあげたカミアを、素早く肩から下ろすと、ケイトが懐へ隠した。
その場にいた人々が蜘蛛の子を散らすように駆け出す。
その最中狂喜の声が響いた。

「ハハハッ！　見ろよトミシク。逃げてく逃げてく！」
「たまらねぇなこの瞬間が」

郁斗が爆風を防ぐためにさげた顔をあげた時には、人はほとんどお

らず、自分たち5人だけが残っていた。

「カミア様！　大丈夫ですか！」

「う、うん」

怪我がないことを確認したケイトとシャリーが、ほっと胸を撫で下ろす。

「おい見ろよ、王族がいるぜ」

トミシクの言葉で気づいたが、爆発によってカミアの帽子はとれ、白い耳が露になっていた。
それを隠すかのようにシャリーが前に立つ。

「貴様等！　なんの真似だ！！」

叫んだシャリーはいつでも抜けるよう、腰の剣に手を添えて2人を睨んだ。
「へへへ…」と舐めるように笑いながら、ステージ上の男たちは左腕に巻いていたスカーフを取った。
あらわれた二の腕を見たシャリーが見開く。

「俺たち、こういうもんです」

そこにあったのは、三日月の内に十字がおさまった赤の刺青。
何の事かわからない郁斗は、隣で目を大きくしているケイトに訊く。

「ケイト、あの人たちは…？」
「また来た…」

また…？

「あれは、赤月の宵の印…」

印？　ということは、あの人たちが…

「赤月の宵…」

郁斗の声は、自分でも驚くほど小さく弱々しいものだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0899z/

あおに重なる

2012年1月4日12時52分発行